

豊田工業大学 卒業式・修了式 学長告辞

本日、豊田工業大学から学士あるいは修士の学位を授与された皆さんに、心からお祝いを申し上げます。ご家族の皆さまも、おめでとうございます。本年度、学部を卒業される皆さんは 83 名、修士課程を修了される皆さんは 49 名であり、博士課程では、本年度 1 名に学位が授与されております。

皆さんはこれまで、学修面では体系的な理解を獲得し、研究面では独創的な成果を生み出すために、努力してこられました。ご努力の成果が現れたとき、嬉しく思われたことでしょうか。困難な場面にも遭われことと思います。皆さんはそれらを乗り越え、今日、晴れの式に臨んでおられます。これまでのご努力に敬意を表します。本学での経験は、皆さんの自信へと進化している筈です。

さて、皆さんには、この 3 年間、新型コロナウイルス感染症により、普段と異なる状況下での活動となりました。学部卒業を迎える皆さんは 1 年生の最後の頃から、修士修了の皆さんは卒論を開始する直前から、大きな影響を受けました。2020 年 3 月末からは緊急事態宣言が発せられて、学修も研究もオンラインとなりました。宣言解除後には、順次、研究室に戻って頂きましたが、卒論生の皆さんが戻られたのは 8 月になりました。学部 2 年生であった皆さんが、登校曜日制限の下でキャンパスに戻って来られたのは、11 月でした。大変にご不自由をお掛けしました。

2021 年 4 月からは、今日まで、全授業を対面で実施できました。各講義室からは、対面と遠隔のハイブリッド形式で講義を実施しました。実験・実習科目については、緊急事態宣言下でも対面にて実施して頂きました。この間の学生の皆さんならびに教職員の皆さんのご努力とご協力に、深く感謝いたします。

一方で、学外実習や修士海外研究実習、また留学等では、予定の変更、中止あるいは、形を変えての学内実施となったこともありました。天樹祭等の行事やサークル等の課外活動にも、大きな制約がかかりました。皆さんにとって大いに残念な場面が多々あったことを、理解しています。一方で、皆さんは、卒業・修了後も、自己研鑽を続けつつ社会貢献を果たしてゆくこととなります。つまり、学修と研究の活動は、姿を変えますが、本質的に、続いていく訳です。

太平洋戦争が終結した 1 年後、1946 年 9 月、混乱が続く中で、東京大学の卒業式において、南原 繁総長は次のように述べています。「従来ややもすれば大学卒業を以って学問を卒業したと考え、研究を放棄するがごとき弊風から諸君は抜け出て、学問への不断の関心と情熱を持ち続けることを、私は望みます」と。本日、卒業・修了なさる皆さんにも、本学で体得した「学修と研究へ積極的に取り組む態度」を活かされて、今後の諸活動の中で、コロナ禍で被った残念な場面をも埋めてなお余りある成長を遂げて頂きたいと、願っています。

南原総長は、旧制東大最後の総長であり新制東大最初の総長でもありました。終戦の年 1945 年の暮れから、私が生まれた 1951 年までの期間です。その間、同総長が社会に対して果たされた役割を、ジャーナリストの立花 隆氏は、その編著「南原 繁の言葉」の中で、こう述べています。「この間ずっと、南原総長は、一連の演述を通して、茫然自失状態にあった日本国民を鼓舞した。国家を再生させるために、いま何をなすべきかを訴え続け、指針を出し続けた」と。

たとえば、1945 年 9 月 1 日に「大学新聞」上で、次のように語っています。「軍人が剣を捨てたとき、我ら学徒の真の戦いが開始される。」「青年よ。学徒よ。希望を持て。理想を見失うな。かような苦難の時代に戦い生きた祖先はいまだかつてなかったと同時に、かような光栄ある（日本と世界の再生という）任務が課された時代もまたかつてないのである」と。

その南原総長は、在任中の 6 年間で最も努力したことは「学問の自由」と「大学の自由」の確立であった、と述べています。さらに、「これが脅かされたところに、今日の日本の悲劇が起こったといい。したがって、その確立は、・・・新日本建設の必須条件である」とも。現在、日本国憲法には、「第二十三条 学問の自由は、これを保障する。」と、簡潔にかつ明確に記されているのです。

大学の役割のひとつは、独創性に富んだ研究の推進です。独創性の実現には、「私達自らが持っている知識と理解とを総動員して全く自由な独自の発想に基づいて熟慮すること」が必須です。つまり、「学問の自由」は、私達はその任務を果たすための唯一の手立てとも言えるのですが、それ以上に、これは国家を健全に保つためにこそ必要なのだと、南原総長は言っているのです。

同総長が語り掛けた言葉は、敗戦直後の時代だから必要であったのではなく、何時の世にあっても重要なのだと思います。今日も、ウクライナでは争いが続いています。他にも、世界では、我が国でも、自由が、人権が、命さえもが、脅かされる事象が多発しています。

「自由」は、「喜び」や「元気」を私たちに与えてくれます。しかし一方で、この「自由」は、脆弱で失われ易いものでもあることを、歴史が、そして現実が、教えてくれています。私たちは、「自由」や「平和」といった大切な宝物を、常に意識して守ってゆかないとまらないのです。

アインシュタインは多くの言葉を残しています。その中にこんな言葉があります。“The World will not be destroyed by those who do evil, but by those who watch them without doing anything.”「世界は悪をなす人々によって破壊されるのではなく、何もしないで彼らを見ているだけの人々によって破壊されるのである。」これは、今の社会にも見え隠れしています。私達には、社会の在り様を常に自ら考えて判断し、それを正し続けてゆく努力と勇気が求められています。

学修と研究において大切な態度は、「帰結に対応した理由に納得するまで考え

る」態度であると、ずっと言い続けてきました。この態度に拘ることで、「理解」を得て深めることができますが、さらに付随して、汎用力である「論理的思考力」も徐々に育てられます。皆さんには、「自ら論理的に考える態度」が習い性となった社会人として、社会で起こる重要な事象に対しても、常に、「自ら考えずにはいられない存在」になって頂きたいと、願います。

専門家として優れた存在になるとともに、同時に、社会人として高い見識をもった存在にもなって頂きたいのです。自由のために、平和のために、持続可能な社会実現のために。そのために、教養、語学、体育、専門の学修と研究、実験・実習、学外実習、海外研修、天樹祭、サークル活動、寮生活、等々の本学での活動が、そして皆さんそれぞれの独自のご経験が、きっと生きてくると思います。加えて、今後の皆さんのさらなるご努力にも期待しています。

さて、本学はトヨタ自動車の社会貢献活動の一環として1981年に開学し、以来、関連企業の皆様方からのご支援に支えられて、本務である教育と研究において、自由で闊達な活動を展開して参りました。2000年夏には7年を掛けたキャンパスリニューアルも完了し、教育と研究のファシリティが刷新されました。2021年には開学40周年を迎えています。ご関連の皆様方からのご支援とご鞭撻に、感謝申し上げる次第です。コロナ下ではありましたが、皆さんにこの新キャンパスで活動して頂くことができ、有難く、また嬉しく思っています。

豊田工業大学の「山椒は小粒でもピリ辛い」存在感を、もっと高めてゆきたいと思っています。皆さんのなかで本学の大学院に進学される方々には、「ピリ辛い存在感」の向上に、引き続き、ご協力頂きたいと思います。社会でご活躍になられる皆さんには、本学の応援団になって頂きたいと思います。

あらためまして、ご卒業・ご修了、おめでとうございます。

2023年3月17日

豊田工業大学 学長 保立 和夫